
魔王様の家庭の事情

生野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王様の家庭の事情

【Nコード】

N4846V

【作者名】

生野

【あらすじ】

魔王様の悩みの種は後継者がいないこと。マッドサイエンティストな長女、剣術馬鹿な長男、覆面作家な末娘。三人はそろいもそろって「王になりたくない」と押し付け合いをしていた。そんなある日、宿敵（と向こうに勝手に思われている）聖教国から勇者が差し向けられるという噂が立って……？ なんちゃって異世界で繰り広げられるすちゃらかファンタジー。

プロローグ（前書き）

スペシャルサックス・小説家になろうチャットルームのみなさん

プロローグ

魔王城の一日は爆音で始まる。

「おはようございます。今日もいい朝ですねえ」

「イルクさまの研究も順調なようでなによりですねえ」

爆音と魔王城は切っても切れない関係だ。城下町の庶民たちがあいさつ代わりの世間話に使うほどに。

「そういえばウワサなんですけど、聖教国がまた性懲りもなく勇者を差し向けるそうですよ」

「いいんじゃないですか？ たまには吟遊詩人の為に話題を提供するくらい」

ここはファールン。大陸の北の果てにあるこの小国は代々魔族が治めるため、魔王領と呼ばれている。

こう書くと言に包まれた地獄のように思われそうだが、実情はいったって平和。たまーに起きる王位争いと恒例行事と化しつつある対勇者戦以外は大した問題も起きない国だ。

そんな魔王領は現在、王位争いの真っ最中でもあった。と言つても……

「イルクちゃん、朝の爆発は罰として7ポイントマイナスよ。これでまたみんな横並びになったわねえ」

ほんわかした笑みを浮かべた貴婦人が手元のノートに何やら書きつける。イルクと呼ばれた白衣の人物は嫌そうに顔をしかめた。黙っていればクールビューティーなのだろうが、今はその美貌は煤だらけ。しかも黒髪が所々焦げているため台無しだ。

「姉さま気をつけてよ！ あたし、ラブシーン書いているところだったのにインクこぼしてだめにしちゃったじゃない！」

抗議の声を上げたのは可憐な容貌の美少女。しかしその手に持った紙に書かれているのはどう見ても男同士が（自主規制）しているシーン。さらに目の下にはくつきりとクマ。髪や爪にはトーンくず。ありていに言って修羅場中の漫画家状態だ。

「つーか、ライム。まーた徹夜か。どうせなら早く寝て早朝からやったらいいだろ。母上ー。ライムも徹夜だから6ポイントマイナスでしょ」

いかにもランニング帰りといった風情の少年が美少女——ライムの姿を見て顔をしかめた。

「それにしても母上。その件については子供たちが合議して結論を出したはずです。——もう一人お子をなしてくださいれば、男女にかかわらず次期魔王として誠心誠意お仕えすると」

「だめです。これは旦那さまのご命令です。三年後、もっともマイナスポイントが多かった者が第1987代魔王になること」

イルクのげんなりとした顔に、貴婦人はおっとりとした笑みを崩さぬままに告げた。

怜悯な美貌の女学者イルク・ファーレン、魔王領の若き宰相（実態はトラップオタク）。快活な美少年剣士セロ・ファーレン、魔王軍大将（実態はただの剣術馬鹿）。無邪気な美少女ライム・ファーレン（実態は末期の腐女子）。

三人は次期魔王の座をかけたポイントレースの真っ最中。

最終的にもっとも魔王夫妻の不興を買ったものが次期魔王として

君臨するのがルールである。

つまり、魔王一家は「残念な美形」の見本市なのだ。

別段目だった悪さをするわけでなく、実害といえば長女イルクの爆発音ぐらい。むしろ治世はおだやかなもので、民からの信頼も決して薄くない。

さかのぼること三千年前、聖戦と称して略奪の限りを尽くした聖教国にキレて、軍隊をまとめてフルボッコにした温和な農夫が彼らの始祖だ。その後始祖が周辺住民に祭り上げられ、仕方なしに王として君臨したのがファールン家のはじまり。いつか自分の役目を肩代わりしてくれる賢君が現れるまで、ファールン家の人々はお互いに王位を押しつけ合っている。

そしてその合間に、自分たちを敵視する聖教国から差し向けられる勇者を追い返したり聖教国からの軍隊をフルボッコにしたりしているわけだ。

これはそんな平和な国を治めさせられている愉快的魔王様一家の記録である。

そのいち・庭師クロムの憂鬱

「使い魔がいたのか……」

突然現れた男は驚いた顔で鴉を見た。羽が所々抜け落ちた翼、不自然な傷がついたクチバシ。きつと男の目に鴉はひどく不格好に映っているだろう。しかも男は仕立てのいい軍服に身を包んでいる。

「ふむ……君、私のところにくるか？　仕事をしてもらうことになるが、衣食住は保証しよう」

男は返事も待たずに鴉を抱き上げた。

承諾の意を示したいが、体は動かない。なんでもいい、ここから逃げ出したい。ここ以上の地獄はそうそうないだろう。残虐な魔術^{ある}師の使い魔^{けぼく}でいるのはもうこりごりだ。

「ああ、そうそう。私の名はアルファードと言った。君の名は……まあ、快復してからにしようか」

その日からクロムはアルファードの家の使い魔だ。

アルファードはクロムに新たな名前と人の姿、そして庭師という仕事を与えた。

それからクロムは様々な驚きに満ちた日々を送っている。鮮やかな花、穏やかな木漏れ日……世界はこんなにも優しい。

そして、こんなにも不条理に満ちている。

クロムの朝は早い。何せ元がトリなので、夜が早いのだ。

夜明けと同時に起きて、着替えるとすぐに庭園へ向かう。城と言うにはやや小さいファールン城だが、庭は広い。半分は実験場であることを考えてもかなりの広さだとクロムは思っている。

水を汲んだ瓶を持って花壇に向かうと既に先客がいた。長い黒髪をゆったりとまとめ、長身に白衣をひっかけた美人……イルクだ。

「おはようございますッス、イルクさま」

「ん？ …… ああ、おはよう」

実験で徹夜明けなのだろう。足元には何か入れていたらしいかご（自走機能付き）、手には羊皮紙とペン、口には眠気覚ましの薬草をつめた煙管。煙管からは怪しい緑色の煙が出ている。薬草の成分が気になるが、聞くのも怖い。

「何か実験でもしてたッスか？」

「ああ。古文書で見つけた植物用栄養剤。 …… ほら」

「…… ニンジン…… つすか」

どうにもニンジンと断言したくないモノがそこにあった。花壇の隅に一行ほど植えられたそれは赤黒い根っこを見せており、さらに葉がわっさわっさと蠢いている。風もないのに、だ。ぶっちゃけ、食いたくない。

「で、ソレとその『えーよーざい』がどうかしたんスか？」

「花壇にちょうどよく空気があったからな。ためしに昨日の昼に種を植えて栄養剤で育ててみた」

そして、一晩で収穫できるサイズまで育ったらしい。ますます食いたくない。

「さて、収穫するぞ。ちょっと離れていてくれ」

表情にこそ現れていないものの、わくわくと嬉しそうなイルク。

もう完璧にただのマッドサイエンティストだ。これでも一国の宰相様だというのだから恐ろしい。政務は極めてまじめに取り組んでいるだけに文句も言えない。

胸を張って足は肩幅、手は腰のあたりで組んでいる。なんとなく軍人とかそういうイメージの立ち姿だ。

そして大きく息を吸い……

「アテインション！」

号令……いや、呪文。それに反応してニンジンがぴたりと動きを止めた。

「スターンダップ！」

さらに呪文。

今度はニンジンたちがひとりでに地面から跳びあがった。

「うげっ」

「アット・イーズ！」

もひとつ呪文。ニンジンたちは今まで動いていたのが嘘のようにばたりと倒れた。

沈黙。鳥たちのさえずりが妙に空々しい。ニンジンが地面に転がるさまは「収穫直後」というべきなのに、どう見ても「死屍累々」のほう表現として正しい気がした。

「よし」

「何がッスか！」

満足げにニンジンを拾うイルクに、ついに耐えきれずに突っ込んでしまう。

「無論、実験の結果だ。古文書通りの結果。味も……」

メスで皮をそぎ落として一口かじる。

「うん、申し分ない」

「……食うんスか、それ」

「当然だろう。肥料を与えて育てた野菜。食べずにどうする」

顔をひきつらせるクロムには見向きもせず、イルクは鼻歌交じりでニンジンを拾い集めて傍らのかごに放り込む。白衣が汚れるのも

気にしないのはイルクらしいというべきか。

「よし、実験は成功したし、あとはこれを厨房に持って行くだけだな」

かごを厨房に向かわせ、イルクは自分の部屋がある棟へと戻っていく。

その姿を見送りながらクロムは決意した。

しばらくの間、城で出された食事のニンジンだけは何があっても残そうと。

イルク的には会心の出来といえる古代の栄養剤『オートプラントール』は、結局そのまま闇に葬られた。誰だって怪しいものは食べたくない。

それでもイルクのマッドっぷりはとどまるところを知らず、今日も今日とてクロムは怪しい実験に巻き込まれないかと怯える日々なのであった。

そのに・末娘ライムの秘密

ファールレン家の子供たちは仲がいい。基本的には王位を押しつけ合う関係だが、争い方はフェアだし誰が王位についてもフォローする心構えはきちんとしてきている。ただ単に「ふさわしくないから王位に着きたくない」だけで、政務や公務が嫌いなわけではないのだ。これはファールレン家の特徴でもあるのだが。

そんなわけでファールレン家の仲良し兄妹。お茶の時間は三人揃うのが慣例だ。主催するのはたいてい末娘・ライム。研究馬鹿の長女や剣術馬鹿の長男に任せると妙な茶会になってしまうので「やめてくれ」と言われているのだ。主に厨房から。

例えば長女は「薬効に優れた茶を開発した」と言っただけで泡立つモノを持ち込んできたりする。耐えられるのはチャレンジャーな料理長くらいのものだ。長男も長男で「辺境部族のうまい果物を持ってきた」と言っただけで悪臭を放つシロモノを持ち込んだことがある。耐えられるのはやっぱり料理長ただ一人だった。

今日の茶菓子は木の実たっぷりのフィナンシェに野菜を練りこんだスコーン、スパイスを使ったクッキー。

紅茶は南方から取り寄せたさわやかな香りの茶葉。ティーカップへ紅茶を注ぐのはしとやかな雰囲気侍女。見守るはチェリーブロードの可憐な少女。

その手の趣味を持った「大きいお友達」が見れば涎を垂らしそうな絵だ。しかし、少なくともこの城の中には少女に手を出そうとする輩はいない。いろいろと危険すぎるからだ。

それは魔力こそからつきしたが精神攻撃ならお手の物な姉の存在でもない。

剣の腕だけなら国一番といわれている兄の存在でもない。
少女自身の特性を恐れていたことだ。

人待ち顔のライムの目の前に少年が「空から」現れた。背には巨大なバスタードソード。動きやすさを重視した皮鎧。一見すると冒険者風のいでたちだが、彼はファーレン家の一員だ。

名をセロ・ファーレン。生気にあふれた容貌と残念な脳みそを併せ持つ武人である。

「よ、ライム」

「兄さまいらっしやい。まーた壁飛び越えてきてー」

「いいだろ。これはペナルティにならねえし」

肩をすくめながら席に着く。風精霊との親和性が高いセロは基本的に空を飛んで移動する。技能を活用しているだけなので、少々礼に欠けていても容認されているのが現状だ。

傍らに置いた背嚢をさぐり、小さなガラス瓶を取り出してテーブルに置いた。

「あ、もしかして頼んでたアロマオイル？　わー、見つかったんだ！　ありがとう兄さま」

「ちょうど市が立ってたんだよ。お、ありがとなカルラ」

眼の前に置かれたカップにセロは満足げな笑みを見せた。

ミルクの代わりに薄切りにしたレモンを紅茶に添えるのがセロ流だ。ライムは濃いめに入れた紅茶にミルクを少し。

「そついや姉貴は？　頼まれてたもん届けに戻ってきたんだけど」
「そついえば遅いね。先に始めちゃおうか」

ライムが手を打ち鳴らすと、控えていた従者たちが茶菓子をサーブしはじめた。

フィナンシェはライムの好物、スコーンはセロの好物だ。スコーンにはクロテッドクリームがつきものだが、セロの趣味でつけてい

ない。

「そう言えばライムは聞いてるか？　なんか勇者が来るとか来ないとか」

スコーンを一つ平らげ、紅茶のおかわりをもらう。その合間にセロが思い出したように言った。

「えー、また？　たしか三十年くらい前にお父様が熨斗付けて返還したばかりじゃない」

「あ、もうそんなになるのか。よく覚えてたな」

「うつすらとしか覚えてないよ。あのときはまだ小さかったからだ」

容姿こそ人間に近いものの、セロもライムも魔族だ。寿命は人間よりもはるかに長いし成長も遅い。よってどう見ても十代半ばのライムもセロも、実はとくに三十を越えている。

「私も熨斗作りを手伝った。セロは……たしかあのときは離宮で修行してたんじゃないか」

横から声が飛んでくる。ついさっきまで空席だった場所に、いつの間にやら二人の姉イルクが座っていた。

「姉貴」

「姉さまいらつしゃーい」

「遅れた。『どこかの誰か』が持ち込んだ厄介事で調整がずれ込んでな」

白衣を引っかけたラフな服ではなく、今日のイルクは青年貴族然とした軍服風の衣装だ。ぎろりとらんだ視線の先にはセロがいる。「しかたないだろー。盗人をひつとらえるのも俺の仕事のうちなんだから」

「そのへんの手続きが舞い込んだせいで書類が増えた。……カルラ、いつもよりもさらに濃く」

「……姉さま、今に胃に穴が開くよ」

イルク用の紅茶は濃い。水色は紅を通り越してほとんど黒く、底

が見えないほどの濃度になる。好物のクッキーは唐辛子を練りこんでいるためかなり辛い。

「それより姉貴、勇者の話だけど」

「そうそう。姉さま！　勇者捕らえたら返還する前に会わせてほしいの」

少し解説する。

勇者は数十年に一度ほどの周期で大陸の中央にある聖教国から差し向けられる刺客だ。ファールン家は基本的に戦嫌いなので、あらゆる手を尽くしてお帰りいただくように工夫している。もともと魔族はあらゆる面で人間よりも高い能力を持っており、その最高峰たるファールン家ともなれば勇者といっても敵う相手ではないのだ。

それでも聖教国が性懲りもなく勇者だの軍隊だのを差し向けるのは、建前は神の教えにのっとった聖戦であり、実態は領土的野心プラス数千年からの恨みと言ったところだ。

「けどさライム、手加減はしてやれよ？　相手はガツガツに教化された勇者なんだし、お前の相手は刺激が強すぎる」

「だな。風紀とか風俗とか大義名分作られて軍隊送られると私の仕事が増える」

セロとイルクに指摘されてライムは肩をすくめた。わかっている、と言いたいのだろう。

それでも、と言って紅茶を一息に飲み干し、派手な音を立ててカップをテーブルに置いた。

「最近ネタ切れ気味なんだもん！」

ライムは表向きこれといった仕事をしていない。まあ、人間で言えば十代前半だ。できる仕事も限られているのは確かだ。しかし実際のところ、ライムは国でも有数の稼ぎ手でもある。

もっともその方法はマトモとは言いがたいシロモノなのだが。

「クロムが愚痴ってたぞー？ 俺の大切な庭木で妄想しないでほしいッス」とか言ってた」

「聖教国は同性愛禁止だ。勇者をネタにしてみる。いらん口実を作る理由になる」

「同性愛とBLは違うもん！」

そう。ライムは俗に「BL」と呼ばれるジャンルにおいて知らぬものはいない有名作家だったりする。王族であることを明かすといういろいろややこしいので覆面作家だが、大陸全土にファンを持つだけあって収入はハンパじゃない。その収入の多くを国庫に入れており、その功績もあって誰も強く批判できない。

BLであれば割とどんなものでもカップリングにしまっう末期の腐女子であり、クロムが丹精こめて育てている庭木からイルクの研究室にある実験用の機材から、とにかく何でも擬人化BLにしまっうほどだ。

「それに、聖教国の読者さんもけっこう多いんだよ？ 裏ルートの流通になっちゃうれしいけど」

「だからこそ聖教国も苦い思いをして……って、ちよつと待てよ？」
眉間にしわを寄せながら紅茶を飲んでいたセロの脳裏に嫌な想像が浮かぶ。

聖教国は同性愛を禁じている。一般的に同性愛とBLは違いを説

明するのが難しい。そしてライムはBL作家であり、さらにファレン家の末娘だ。

その想像が外れていることを祈りつつ、セロは隣に座るイルクを見る。

「なあ姉貴ー。俺、ヤな想像しちやっただけど」

「言っな。予想はつく」

どんなに渋い茶を飲んでも表情を変えないイルクの眉間にしわがよっている。どうやら同じ結論に達したらしい。

すなわち。

「国内でライムの本が流行りだしたから、あちらさんキレたんじゃね？」

「言っなと言っただが」

「だってよー、なんか周期的には向こうも勇者の選定急ぎすぎてる感あるし」

「ちよつと何それ。たしかに知らない人にはBLと同性愛は同じに見えるかもしれないけど、裏ルート開拓したのはあたしじゃないよ」

姉たちの推測が不服だったのか、ライムが愛らしい口を尖らせる。そう。見た目だけは非常に愛らしい。中身はアレだが。

「そりゃそうだが、向こうさんとしては『お前が書かなければ誰も読まない』くらいは言いたいと思うぞ？」

「表向きの著者はいるけど、聖教国の情報網をフルに利用すればライムとのつながりくらいは突き止められるかもしれない」

「ひつどーい！ 表現の自由侵害！」

ぷりぷりと怒りながらフィナンシェをほおばるライムは、本当に見た目だけは無垢で愛らしい少女だった。

一方その頃。

「へつくしっ！……うっ、寒気が。これも魔王の瘴気か？」

「いや、それはないと思うが……つか、これが魔王領？ 想像とだいぶ違うんだが」

金茶の髪に青い瞳、腰には業物の剣。全身から「俺は勇者です」オーラを出した青年と指揮棒に似た魔法杖を携えた少年が魔王領に足を踏み入れていた。

どんな（馬鹿げた）艱難辛苦が待ち受けているのか、彼らはまだ知らない。

そのさん・魔術師ブラウの災難

「で、どうする。また熨斗を作るのは面倒だから却下」

「とりあえず手合わせさせてくれよ！ 俺、前回の勇者の時は城に居なくて見られなかったんだ！」

「兄さま、聖剣当たたらじんましん出るじゃん。それよりまずは取材させて！ 一緒にいる魔法使いさんとはどんな関係なの？」

捕らえられた牢の中。待っていたのは拷問ではなく魔王の子供と名乗る三人組の好き勝手な言い分だった。

「てめえら、好き勝手言ってんじゃねえ！ とつとここから出せ！」

喚く勇者を生ぬるい視線で見つつ、相棒は心中でつぶやいた。

どうしてこうなった。

「ここが魔王領の中心地のはず、なんだがな……」

目の前に広がる光景はのどかな城下町そのもの。売り子が道行く人の注意を引く。売っているものもパンや野菜などの……つまりは極めて平和なシロモノだ。違いといえば人間がほとんどおらず、かわりに獣人や魔族が多いことくらいだ。

「魔王領が獣人を受け入れてるっつー噂は本当だったんだな」

「油断するなよブラウ。獣人を軍勢にしているだけかもしれないんだからな」

大真面目な顔で傍らに立つ青年が言う。彼的にはささやく程度の

……しかしどう考えても世間話をする程度の声量。ブラウと呼ばれた少年は突っ込もうとしたがすぐにやめた。今更この男に突っ込んで始まらない。魔王討伐の旅に巻き込まれた時点で、ブラウはさまざまなことを諦めていた。

「まあ、状況は少しずつ把握してきやいいだろ。それよりまずは潜伏先を決めて……」

「そのパン屋のおばちゃん！ 何か困ってることはないか？ この勇者が助けてやろう」

「ってオイ！ 少しは俺の話を聞け！」

どこか異世界からやってきたと自称するこの勇者、名前の迷走は伊達じゃない。『勇者ならこれがセオリーだろ』という謎理論のもと、民家に無断侵入したうえに戸棚の菓子のパクろうとするわ今のよう^{メイズ}に世間話抜きでいきなり情報収集しようとするわ。メイズの勇者理論に付き合わされて三ヶ月ちよつと。そろそろ胃の痛みは日常になりつつある。

「あらあら、勇者なの？ ご苦労さま。魔王様の城ならあの大きな塔の下にあるお屋敷よ」

「って、素直に答えるのかよ！」

「当然だろう、ブラウ。モブの道案内もまたセオリーだ」

背が低く小太りのおばちゃん^はにこやかに言う。耳がややとがっているところを見ると妖精族の類だろうか。おばちゃん呼ばわりもスルーとはなかなか素敵な性格をしていらっしやるらしい。

「……てか、『ご苦労さま』って」

「大変だねえ、お仕事。ほれパン持っておいき！」

「うおっ！」

小柄なブラウがやっと抱えられるサイズの紙袋いっぱい詰まったパンは、重くはないがかさばる。うっかり杖を取り落としそうになるが、それは意地で耐えた。杖は魔術師の命だ。

「ありがとな、おばちゃん。絶対魔王を倒してやるぜ！」

メイズはパンが入った袋に豪快に手をつ突っ込んで（おかげでラスクがいくつか落ちた）黒パンを齧りながら歩いていく。ブラウは慌てて後を追った。

「なあ、メイズ。変じゃね？」

「なにがだ？ パンなら美味いぞ」

「いや、パンはいいんだけどよ。なんつーか素直に場所を教えてくださいたのはありがたいんだが、怪しい」

ブラウも紙袋からパンを一つ取り出した。香草が練りこんであるらしく、一口齧ると香ばしさの中からさわやかな香りが広がってくる。美味い。この街のパン屋はレベルが高そうだ。

「なんつーか、うまくいき過ぎ。なんであんな素直に魔王の城をバラしちゃうんだ？」

「モブだからだろ」

「だからそのモブって何だよ……」

「モブはモブだって。魔王を倒して欲しいから言っただけに決まってるだろ」

メイズは胸を張って言い切るが、やはり納得はできない。

もしも魔王が民衆に圧力をかけているなら道行く人にもそれらしい雰囲気が出るはずだ。言いよどむことも目をそらすこともなく『魔王の居城』を教える姿。おかしい。

「つつーか、そもそも魔王が悪事を働いてるってマジなのか？ 魔王領に入ってから向こう、それらしいもの見たことないんだけどな」
「お前、頭いい割にバカだな。悪事働かなかつたら魔王の意味ないだろ」

メイズの主張はわからないでもない。少なくとも聖教国は魔王は邪悪な存在だと教えられている。

しかし、だ。ブラウは元々聖教国の人間ではない。ブラウの祖国は政治的にも宗教的にも中立というか、辺境すぎて聖教国としても教化のメリットがない場所だ。そのせいかもしれないが、聖教の教

義や主張に関してもあまり関心はない。

つまり、ブラウは魔王が絶対悪だと思っではいなかった。

勇者の旅に随行しているのは、成り行きでつき合わされているだけにすぎない。

「今更お前に何言っても無駄だつてことはわかってる。とりあえず、頼むからウチに来た時みたく大声で名乗ったりするのだけはやめろよ」

あの時はどこの阿呆だと思った。聖剣が本物でなければ病院に連行しただろう。

実際に聖剣は本物で、剣の実力も本物だった。魔術学院が創り出したゴーレム三体を剣の一振りで見つ二つにしてしまったのだから。『自分は勇者で、旅の仲間となる魔術師を探している』と言いだしたメイズに、教授はブラウにその役割を押しつけた。前日の授業で間違いを指摘して鼻っ柱をへし折ってやったのがまずかつたらしい。

魔王城にはなぜかたくさんの案内板があった。『税』『道路』『橋』『警備』『図書館』などなど。

「役所か、ここは」

「いや、わからないぞ。これは魔王の罾かもしれん」

単なる旅人を装ってみれば、城にはあっさり侵入、というか入場できた。廊下を歩く影に亜人や獣人が多いのは城下と変わらない。なんとなく魔術学院の事務棟を思い出すブラウとは反対に、メイズはあたりを警戒し過ぎている。かえって怪しい。

そんなメイズが気になったのか、青年貴族風の衣装をまとった人物が二人に近づいてきた。

「失礼。迷われているようならば案内しますが」

「お？」

珍しく、人間のようだった。首の後ろできつちりとまとめた黒髪。長い裾の上着が似合うすらりとした長身。表情に乏しい瞳がフレームレスの眼鏡の奥からメイズたちを見据えている。

ありていにいえば美人だった。メイズの言葉を使うなら『クールビューティ』というやつだろうか。無表情であることは欠点ではなく、むしろ冷ややかさが最大の魅力なのだろうと思わせる。

そして、メイズは面食いだった。

「おまえ、もしかして人間か？」

「母は人間ですが」

人と別種のハーフ。これだけ種族が入り乱れている魔王領なら珍しくはないのだろう。一人納得しているブラウをよそに、メイズは美人の手をがっしりと握って宣言した。

「今までよく耐えていたな。俺は勇者だ。君を助けに来た！」

メイズがドヤ顔をしている。

きつとメイズの脳内では、この美人が花のような笑顔を浮かべて感謝の言葉とともに抱きついてくる図が浮かんでいるのだろう。が、現実は違った。

「貴君が、勇者？」

「ああ」

「助けに？」

「そうだ」

「……誰から誰を？」

「魔王から君を！」

冷静なアルトと熱血なテナーが掛け合うこと三往復。

美人は一度深くため息をつく、勇者の手を振り払って指を鳴らした。

「衛兵、侵入者を確保」

どこからあらわれたのか、ブラウの腰ほどの身長しかない小人たちがあつというまにメイズとブラウを縛りあげていく。

「お、おい！ 俺をどうする気だ！」

「侵入者は牢獄へ。別段おかしな流れでもなかろう」

声にわずかな苛立ちを混ぜて、美人は書類を拾いながら答えた。ぶつぶつと低く呟いているのは多分悪態か何かだろう。

「自己紹介が遅れたな、勇者殿。魔王領の宰相の任についているイルク・ファールン。貴君が倒そうとしている魔王の第一子だ」

そして、話は冒頭に戻るわけである。

「やっぱり勇者君は受けだと思っの！ 魔術師×勇者でもいいけどイチオシはやっぱり兄さま×勇者かなあ。敵対勢力のカップリングは鉄壁だし」

「いや、オレを使うなよ」

「仕方ないじゃない！ 本当は父さまを使いたいけど姉さまから結婚してる人のBLは禁止されてるんだもん」

「趣味に口を出すのは本意ではないが、モラルは重要だからな」

鉄格子の向こうで、魔王の子供たちは理解できなくもないのだが

絶対に理解したくない会話をしている。隣では置いてきぼりのメイズが出せと喚き続け、牢屋の中は力オスだ。

そろそろメイズを力づくで黙らせようと考え始めたころ、二人を縛り上げた小人がイルクを呼んで耳打ちをした。イルクはその耳打ちに何度かうなずき、小人を退出させる。そして騒いでいる弟妹をデコピンで黙らせた。

「そこまで。ライム、カルラに茶の用意をさせろ。セロは着替えてこい」

「わかった。行ってくるね」

「なんかあったのか？」

イルクは妹を見送りつつ、自身も崩していた襟元を整える。そして鉄格子の前に立つと、初めて表情をはっきりと動かした。

「喜べ、勇者殿。我らが魔王陛下におかれては、貴君ら聖教国の刺客に対して直々に尋問を行われるそうだ」

口元に浮かぶ笑みは不敵で誇らしげなものだった。

そのさん・魔術師ブラウの災難（後書き）

じじく、とくじじくじじく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4846v/>

魔王様の家庭の事情

2011年9月17日03時19分発行